

二葉館 あれこれ Vol.3 上げ下げ窓

文化のみち二葉館の廊下と、展示室1と7にしつらえてある窓は「上げ下げ窓」です。窓枠にワイヤーが見えます。隠れています。そのワイヤーの先には重りが下がっているのです。

この「上げ下げ窓」とは、2枚のガラス窓を縦長の窓枠に上下におさめて、上下どの位置でも自由に開けて止めることができる窓のことです。仕組みとしては、窓の重さとつり合う重りを紐やワイヤーで結び、窓枠の上部に取付けられた滑車に掛けてバランスをとることで、少しの力で開閉や自由な位置での固定ができるようにしています。



窓枠の滑車とワイヤー

展示室1

二葉館の上げ下げ窓もこの仕組みで、重りが上下に動く場所は、壁の中の部分を空けることでその空間を確保しています。創建当初の和館部分と洋館部分の窓には上げ下げ窓が多用されていました。二階の蔵前の廊下には、創建当初の上げ下げ窓が展示してあり、重りの部分が見えるようになっています。

展示室1と、その2階の展示室7は、4本の上げ下げ窓を組合わせて円形の壁が造られています。ここは窓の間に柱を立てる余裕がなく、窓枠自体を構造として造らないとできないため、高度な技術が用いられています。この窓枠の材料は全てナラの無垢材で、滑車は枳材の厚さに合うものを新たに製作して復元してあります。

二葉館にお越しの際には、天井、床、窓の作りなども注目してみてください。大正のデザインと技術がご覧いただけます。



文化のみち二葉館を出て南にまっすぐ進み約10分、泉二丁目の交差点を東に曲がって左裏手に位置するお寺が貞祖院です。

このお寺は、京都知恩院の末寺で、ご本尊は木造阿弥陀如来坐像です。清洲城主であった松平忠吉（徳川家康の四男）の菩提を弔うため、養母の於美津が慶長十三年（一六〇八）に清洲に建立し、忠吉の戒名から玄白寺と称しました。慶長十五年（一六一〇）に於美津が没し、その戒名より寺の山号と院号をとって、喜秀山貞祖院玄白寺と改号されました。



その後、清洲より現在地に移りましたが、天明二年（一七八二）の大火によって寺坊が焼失したため仮本堂のまま、明治五年（一八七二）に、同じ浄土宗で尾張徳川家の菩提寺である建中寺から、五代五郎太の御霊廟として正徳四年（一七一四）に建立されたものを譲り受け、現在の本堂になりました。

さてこの本堂、木造入母屋造椽瓦葺向拝付で総漆塗。外陣は格天井、内陣は折上格天井で、漆塗りや極彩色の装飾が見られます。



「貞祖院玄白寺」

文化のぶらりさんぽみち ③

内陣の格天井は百二十榫あり、菊の紋様と葵の紋が描かれています。菊の紋様は、花卉の中心に葵の紋が施されていますが、よく見るとその上から覆うように、葵の紋が貼り付けてあるのが分かります。これは維新後に天皇家に配慮して、上から葵の紋を貼り直したのでは、ないかと推測されています。



山門を入って右手には、安政年間建てられたとする庚申堂があり、青面金剛と三猿、そのとなりには薬師如来木坐像が祀られています。

本堂の南中庭と庫裡前の二か所に水琴窟があり、庫裡前の坪庭の方は珍しい双音の作りです。この水琴窟、今ではなかなか耳にする機会がありませんが、貞祖院を訪れると、身が洗われるような清らかな音を聞くことができます。

ぜひ一度、心静かにその音色を感じてみてはいかがでしょうか。 ※本堂と庚申堂の中は通常非公開です。



庫裡前の水琴窟

SHIKI 四季おりおり ORIORI

1階展示室2（旧婦人室）では貞奴や桃介が愛用していた着物帯などを展示しています。これらは貞奴の孫である川上初氏より寄贈されたものです。約30点の寄贈品の中から季節に合わせて年10回ほど展示替えを行っています。今回は冬の展示替えの他に、開館10周年記念「川上貞奴 秋冬愛蔵品展」（平成27年2月8日〜14日）で特別展示された衣裳もご紹介します。

かいまき布団

青地で船の帆に紅葉・丸に電・丸に稲妻の紋様が入っているものと、赤地で鶴の紋様が入っているものの2種類。

普段は1階展示室2（旧婦人室）に畳まれた状態で展示してありますが、「川上貞奴 秋冬愛蔵品展」では他の着物や調度品と一緒に広げた状態で展示されました。

着物

着物は黒塩瀬「波に千鳥」の模様で、抱割紅葉（福沢家の家紋）の五つ紋入り。共柄の下襲付きです。



着物

着物は輪子で「波に松」の模様、九枚笹（川上家の家紋）の三つ紋入り。

長着は比翼仕立て、下襲を合わせると、三枚同じ模様が重なって見えます。

from Archive

書庫棟から 寄贈品

このコーナーでは折に触れて、二葉館の書庫にある資料を紹介してまいりました。ではどのように資料が集められるのでしょうか。今回は寄贈品について、受け入れから保管までの大きな流れをお話しします。

ご寄贈のお申し出を、作家ご本人またはご遺族、その関係者や文学研究者などから頂くと、始めに物品の内容や希少性と、書庫の収蔵量には限りがあるため点数を確認してから、受け入れの決定がされます。



では、どのようなものがあるのでしょうか。それは、著書や資料本などの書籍、原稿や関連資料、メモ、書簡、愛用品など様々です。そして寄贈品が届くと、改めて資料として詳しい調査がされます。資料の年代や背景、状態などを確認します。

その後文学ボランティアによる分類仕分け作業がされます。書籍の場合、作品ジャンルによって仕分けして分類コードを付けていき、図書館の本にあるようなラベルが貼られます。物品資料についても、大まかな仕分けのあと、それぞれを更に分けて整理します。原稿や新聞・雑誌の切り取りなどはできる範囲で掲載元を調べます。そうして割り振り作業をしながら、並行してデータ化をしていきます。

寄贈品は、納入されるまでに様々な環境の下におかれたので、棚に入れる前には専門業者依頼して、防カビ防虫のため燻蒸処理がされます。そしてはじめて物品別に書庫へ保管されるのです。



このようにして納められた資料は、テーマを考えて企画展や常設展で展示します。これからの皆様にご覧いただけるように、順次ご紹介して参りますので、楽しみにしてください。